リハビリテーション科学部
言語聴覚療法学科 編

OB訪問

JR野幌駅南側の住宅街に今年4月、一軒家をリフォームした「ことのは発達相談室」をオープンさせた川岸さん。心理職から言語聴覚士へ、事業所勤務から起業へ、アグレッシブなOBです。

ことのは発達相談室（江別市）
代表・児童発達支援管理責任者・言語聴覚士
川岸 尚史さん（心理科学部言語聴覚療法学科 2013年3月卒業［現リハビリテーション科学部言語聴覚療法学科］）

心理士としてキャリアスタート

「話す」「聞く」「食べる（飲み込む）」に関する障害の専門職・言語聴覚士。本学を卒業した言語聴覚士の多くが病院・福祉施設の高齢者リハビリテーション分野で活躍中ですが、川岸さんの専門は小児・児童分野、さらに独立開業を果たした経営者でもあります。

高校卒業後に他大学で心理学を学んだ川岸さんは、在学中にボランティアとして通った児童養護施設での経験から子ども分野の支援を志しました。卒業後は札幌の児童発達支援センターで心理士として働き始めましたが、そこで知ったのが、ことばの発達やコミュニケーションの問題に対する支援への高いニーズ。「言語聴覚士の資格があれば、もっと役に立てる」と考えた川岸さんは一度現場を離れて国家資格取得をめざすことを決意、本学3年次に編入学しました。

言語聴覚士として療育を追究

本学卒業後は言語聴覚士として江別市子ども発達支援センターに就職、経験を積んで事業所運営に責任をもつ児童発達支援管理責任者資格も取得しました。保育士、心理士など様々な職種と連携して子どもたちと関わる毎日には確かな手応えがあり「仕事はどんどん面白くなっていった」といいます。

転機の兆しは約2年前。支援を追究する中で「思い描く療育をかたちにしてみたい」という気持ちがわき、同僚と理想像を語り合ううちに具体的な構想へと発展していったのです。そして、川岸さんは2度目の大きな決意をします。起業です。

共同経営者との熱い議論はほぼ日課。その熱意の源はいたってシンプル。「人と目を合わせられない子どもが私の目を見て話せた瞬間、表情のない子どもから笑顔が出た瞬間、『この先生に伝えたい』という気持ちを引き出せた瞬間が本当にうれしい。その瞬間に、どんな苦労も報われます」。

志を一つにするスタッフのチームワークは抜群。子ども一人ひとりの課題に複数の専門的視点を融合させて臨みます。

やりがいは「起業」へ発展

起業は事業計画書作成から金融機関等との調整、物件探しなど初めてのことばかり。「眠れない、食事が喉を通らない日もあった」といいますが、今年4月、前職場の同僚と共同で「ことのは発達相談室」を開業、1日10名定員の児童デイサービスで発達障害や構音・きつ音障害、難聴などの支援を始めました。

川岸さんは同施設に療育への思いを詰め込みました。専門的な個別支援のため、スタッフには保育士や児童指導員に加え、言語聴覚士、心理士、保育士など専門職を揃えました。このように多様な専門職が揃う児童デイサービス施設はまだ多くはありません。また、愛着関係が成長の大事な基盤と考え、保護者も一緒の「親子通所」が基本です。施設名の「相談室」には、保護者の不安に寄り添う気持ちが込められています。さらに、子どもの日々の過ごしやすさを効果的に支援できるよう、幼稚園や学校とも密に連携しています。

必要な支援を必要な人に

江別市には民間の小児・児童の通所施設が約30カ所あるものの、まだ待機者がいる状態だそうです。そこで「必要とする子ども誰もが身近な場所で専門職の支援を受けられる地域づくりに貢献したい」と、来年4月には同じ地域に児童デイサービスの2店目をオープンさせる予定です。必要とする声がある限り、川岸さんのチャレンジはまだまだ続きます。功名心とは一線を画す、人の温かさが通う言語聴覚士の事業展開から、目が離せません。

出番の多い玩具は「手に触れるものだから上質なものを」と、ほぼ全てをデザイン性、機能性が高く、手触りもよい北欧製（一部国産）から自らセレクトしています。